

第6回 庭見草 ニワミソウ

■見て、巡る「御庭(おにわ)」の至宝：修学院離宮

京都市左京区修学院藪添地 ※拝観には事前申し込みが必要です

2月25日の街角サロン「庭園部会：修学院離宮」に同行し、空間創研の吉田氏の講義の後、宮内庁京都事務所林園課の川瀬さんのご案内のもとたっぷり時間をかけて「見学」させていただきました。

江戸時代が始まり、国が安定していくなかで、長命で様々な風流を体現してこられた後水尾天皇。突然退位し上皇として院政を開始する際に造営された仙洞御所(桜町殿)について、山荘として比叡山の袂に上皇自ら指揮をして、上離宮・下離宮が設けられた。中離宮は当初、朱宮(第八皇女)御所として造営されていたが、後に林丘寺となり、明治時代に一部が宮内庁に返納され編入された。

■この地に離宮を定めるまで

後水尾天皇はここに離宮を定めるまでに岩倉、幡枝、長谷の地に山荘を営んでいる。この中で幡枝離宮跡は現在の圓通寺として同じく比叡山を望む借景を取り入れており、当時の姿を偲ぶ事ができる。

■底力

下離宮の御幸門を入り寿月観の庭園を見る前にと、普段参観者が立ち入らない場所に案内された。多種多様な苔が繁茂しふかふかとしているゆりかごのような場所。苔を育てるために何か特別な事をしているわけでもなく、ただこの地にこれだけの生物を育む力がある。とのこと。比叡山から続く谷筋の先にあり、豊富な伏流水がこの地の底力を涵養している。

■今の感覚ではできないこと

中離宮の楽只軒から望む池に架かる石橋と滝の石は全て寄せかけ合い、捻るように据えられ、全体として調和が図られている。傾いた石橋を渡る前の石の据え方や天端の取りかたで、足元に注意を向ける。水平垂直に据えることから作庭を教える今では出来ない感覚。

■京(みやこ)を望み、浮かべる水平線

上離宮は大原や八瀬の地からの四季のおとづれを感じ、上皇が舟を浮かべ遊んだという浴龍池は西浜が生み出した水平線により京を借景として水に浮かべている。浮き世離れた達観の風景。

■風景式庭園

離宮をつなぐ松並木は明治に整備されたが、造営当時から明治までは田の畦道を通って行き来していた。その後周囲の農地は古都法買入地として買い上げられ、地元農家により耕作が続けられており、全体としての田園を取り込んだ風景式庭園ともなっている。

■ありのままに育つのを待ち、人は手を添えるだけ

その場に生えている木は、自分の意思で、その地に相応しい高さで伸びるのをやめ、横に広がる。我々は、美しい枝振りを意識しながら、息苦しくならないように枝葉を摘まんでいくくらい。伸びすぎそうなので切ってしまうとか、他の地から銘木を持っていくのではなく、大切なのは今生きている掛け替えの無い木を後世に引き継いでいくこと。静かに庭を歩き、色と風、薫り、足音を感じながら自らと向き合う時間を参観者に提供すること。…と川瀬さんは語る。



上離宮・隣雲亭から浴龍池



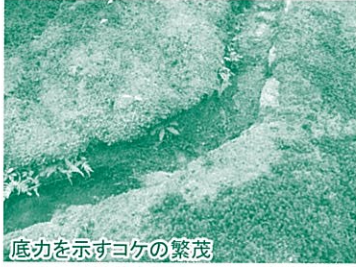
中離宮・楽只軒から池と石橋



下離宮・露地と灯籠



離宮周辺の田園



底力を示すコケの繁茂



中離宮



傾き・捻れている石橋と飛び石の配置



京を借景とする浴龍池の水平線



松並木と田園の風景



隣雲亭からは昔の田園風景の先に、今の京都が盛気楼のように見える。

◇後記◇ 池泉回遊式庭園、風景式庭園としても至宝といえる御庭。時代を経てあらゆる好み・わざを受け入れながらだらかに調和している様を見た後はただ「満足」の一言につきる心地になります。必ず訪れるべき場所。

【謝辞】記事の一部は川瀬さんのご説明から引用させていただきました。